

資料紹介

トルコにおけるインフレーション

Aykut Kibritçioglu, Libby Rittenberg, and Faruk Selçuk, *Inflation and Disinflation in Turkey*, Aldershot: Ashgate, 2002. 184p.

1980年にIMF構造調整を開始したトルコでは、貿易と金融の自由化は進んだものの、インフレは1980年代後半には60%台、1990年代には80%台とむしろ悪化した。1990年代にはこの高インフレを押さえ込むための試みが幾度あったが挫折してきた。本書は、トルコにおけるインフレの原因とその影響を包括的に分析している。原因についてはKibritçiogluのレビュー論文が、供給（実物）要因よりも需要（貨幣）要因のほうが大きいという全体像を示している。その上でAkçay, Alper and Özmucurは財政赤字の増加がインフレを高めること、財政赤字の指標としては連結政府部門財政赤字よりも、公共部門借入所要額（PSBR）が現実をより正確に反映していることを示した。ただし1990年代にトルコのインフレは慣性的（前期のインフレ率に強く影響される）傾向を強めた。これについてはErlatの論文がある。他方インフレの影響については、Nas and Perryが経済成長を押し下げる効果を長期的に分析している。Selçukはインフレ下で見込まれる通貨発行収入増が、貨幣代替率（トルコリラと外貨の間）が高いために実現していないと指摘している。Alper, Berument, and Malatyalıは、インフレが低下すれば金融制度がより安定すると論じている。2000年以降トルコで実施されてきたIMF主導の経済安定化政策は、本書の政策含意を体現している。2003年のインフレ率は約20%にまで低下した。（間 寧）

中央アジアの新しい概説書

宇山智彦編著『中央アジアを知るための60章』明石書店、2003年。317ページ。

本書は、明石書店から出版されているエリア・スタディーズ・シリーズの中央アジア版である。地域的には、旧ソ連を構成していた5カ国、すなわちウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン（キルギス）、タジキスタン、およびトルクメニスタンが主な対象とされているが、中国の新疆ウイグル自治区や、ロシアのタタルスタンとバシコルトスタンも一部言及されている。

表題にあるとおり60章からなる本書は、「シルクロードから現代へ」、「ことばと芸術・文化」、「中央アジアの町と人々」、「政治変動とイスラーム運動」、「市場経済移行の苦しみ」、「『グレート・ゲーム』と日本」の計6部から構成され、歴史、政治、経済、文化、生活、国際関係までを幅広くとりあげている。

中央アジアといえはすぐにイメージされるシルクロードや、なにかと話題にのぼる石油・ガスなどの資源開発、いわゆるイスラーム過激派、アラル海の環境問題などのトピックもカバーされている。また、儀礼や祝祭、料理などを扱った章からは、人々の暮らしぶりを感じることができる。さらに第6部は日本と中央アジアの関係について、いろいろな角度から考えるヒントを与えてくれるだろう。

中央アジアと一口に言っても、そこには様々な民族、文化、言語が存在しており、ソ連邦崩壊によって誕生した中央アジア諸国も、それぞれの路線を掲げ、異なる発展を遂げてきている。本書をひもとけば、中央アジアの全体像とともに、その多様性が伝わってくることだろう。

中央アジアの歴史については優れた概説書が多数あるものの、この地域について幅広く正確な知識を与えてくれる本は、それほど多くない。編者が言うように、本書は「多数の専門家を執筆者とし、歴史と現状の両方にまたがる概説書としては、日本ではじめての試みである」といえよう。（岡 奈津子）